

○森下敏子（神戸女子短大）

【目的】わが国の喫煙率は減少傾向にあるが、青年期の喫煙率は上昇しつつある。喫煙はガンや肺疾患だけではなく、栄養素の吸収や身体の成長にも影響を及ぼすとされることから、成長期の世代の喫煙に対する意識および実態調査を行った。

【方法】調査対象は兵庫県西宮市の男子高校生1,2年 618名、神戸市の女子大学生 250名男子大学生 92名の計 960名により行った。調査時期は1996年7～9月にアンケート用紙を配布し、自記入方式で行い、一部複数回答も可とした。有効率は95%であった。統計処理は平均値の差の検定と $\chi^2$ 検定を行い有意水準は5%とした。

【結果】喫煙状況では「現在吸っている」が高校生7.5%、大学生17.0%であり、そのうち女子大生は6.4%であった。「過去に吸ったことがある」は高校13.9%、大学4.7%（内、女子2.4%）であり、その結果、高校では24.5%、大学では21.7%（女子8.8%）が喫煙経験者であった。喫煙を始めた時期は喫煙経験者の高校生のうち21.1%が小学校、64.4%が中学時とし、大学生では1.4%が小学校、24.3%（女子8.1%）が中学時としている。 $\chi^2$ 検定の結果、喫煙の開始と年齢には相関が見られた。喫煙をやめた理由は62.8%が「体に悪い」としている。「喫煙がガンの原因と思うか」との問いに対し、「疑いがある」と答えたものを含め、高校生80.1%、大学生では88.3%（女子75.4%）が「関連性があると思う」と答えた。「主流煙と副流煙のどちらが影響が大きいか」という質問に対し、高校生の77.4%、大学生の68.4%（女子60.8%）が「副流煙」と答えた。禁煙の方法としては「タバコ販売の法規制」「広告やCMをやめる」「自販機をおかない」「禁煙外来の設置」など社会的な対策も必要であるという回答が多く得られた。